

## 「翻訳者は反逆者」

東埼玉病院  
院長  
川井 充

最近、ある学会誌の巻頭言を依頼された。医療関係者は一般の日本人が使わないような日本語をふだんから使うが、それに気づいていない。患者とのコミュニケーションの支障になっていることを自覚すべきであるという内容をエッセー風にまとめた。頻回ということばを頻回につかえば医療関係者だろうというくだりがあるので、「頻回を頻回につかう」という標題をつけた。エッセーなので許されるという思いがあった。そこまではよかったのだが、うっかりしていたことがひとつあった。学会誌であるので、英語の標題をつけてほしいというのである。

標題はそれだけで内容を端的に示すものでなければならぬ。わが「医療」の投函前チェックリストにもそのことが「タイトルは、単独の論文として意味が伝わるようになっていきますか」として書かれている。査読していると1例の経験であるのに普遍的な内容を示すような標題がつけられているものがある。日本では「○○○をきたした×××の一例」とするように指導しているところもあるようだが、私は（個人的には）これが好きではない。これではその症例で報告する価値がどこにあるかに主眼をおいた「×××の一例にみられた○○○」の方がよいと思う。要旨は内容を数百字でまとめたもので、それだけを読んで内容が伝わらなければならないが、標題はさらにそれを1行でまとめたものではないだろうか。

「投函前チェックリスト」にはこれに引き続いて「和文のタイトルと英文のタイトルが揃っていますか」と書かれている。でもこれって本当にむずかしい。確かに和文と英文で違うことをいっている投稿

原稿がときどきある。内容がちがうというのは科学論文であれば許されない。でもどこまで一致を求められるのだろう。今私は「医療」の母体である国立医療学会の総会に参加するために福岡にいてホテルでこの原稿を書いているのであるが、ちょうど手元にプログラムがある。わが「医療」ではそのシンポジウムで特集を組むことが多いのだが、標題をみると「へこたれない看護師を」とか「人を財産（人材）とするために」とか「結核医療は“現代日本の縮図”」とか英語にするとどうなるのかなあなどと思ってしまう。

Spirited AwayとかDeparturesとかを聞いて何のタイトルかわかる人はかなりの映画通だと思う。前者は「千と千尋の神隠し」で後者は「おくりびと」である。どちらもアカデミー賞を受賞した国際的に認知された映画であるが、英語のタイトルをつけた人はやはりすごい。千と千尋という主人公の名前をはぶくことには勇気がいるし、英語にない神隠しという概念をことさらに説明する愚をおかさなこともすばらしい。Departureは立ち去ることで、飛行機や列車の「出発」にも使われる生きたことばだが、逝去という意味の古語もあるらしい。undertakerとかmorticianとかに直訳すると雰囲気があるがそこなわれてしまうのだろう。「おくる」を「去る」方に発想の転換したところは脱帽である。

むかしから「翻訳者は反逆者」といわれている。そう、誰が訳したか知らないがこの日本語も実にすばらしい。イタリア語の“Traduttore, traditore”がもとの言葉なのだろうが、日本語も同じように韻を踏んでいる。この「医療」の編集において和文タイトルを英文になおすには相当の技量が必要ではないかと思うことが多く、われわれはあまりに未熟なのではないかと感じている。どうかみなさま、あまり英訳がむずかしいタイトルをつけないでください。

ちなみに、冒頭に書いた「頻回を頻回につかう」は投稿のときに“Peculiar Japanese spoken and written by doctors”としていたのを、悩みに悩んだあげくに、“Is innocent doctors' slang really innocent?”として校正のときに変更しました。でもまだじっくりときていません。